

第28群 診断・検査〔Ⅱ〕婦人科 (245~255)

245. 子宮頸癌患者における病態生理学的検索

(国立埼玉病院) 村田 高明, 亀井 清
渡辺 茂, 吉村 泰典

担癌患者の病態を知る上で局所々見の他に全身的病態を把握することは予後の判定や適切な治療への資料となることから临床上重要な意義をもつものと考えられます。

私共は49年1月から本年3月迄の約4年間の頸癌患者45名(内0期10名, I期9名, II期4名, III期7名, IV期15名)の経過観察による病態生理学的検討を行い, 血沈, 血色素, 白血球数, リンパ球数, T及びB細胞数, 総血清蛋白量, A/G比, 血清蛋白分画, 血清蛋白成分分析, GOT, GPT, ALP, LDH, 夫々のアイソザイム, CRP, AFP, DNCB, PPD, PHA, FDP 更に石川の皮電図を加え検索を行った。

その結果, 血沈は悪性度に関し促進し, 貧血度を増し, Tfの減少, リンパ球数の減少, T細胞数及び比率の低下は予後不良であった。血清蛋白では総蛋白量は低下し, 蛋白分画では末期にはAlbの低下, α -glbの増加がみられ, そのパターンはAPR型から蛋白不足型への移行が認められた。IgGは正常域内にあり, IgAは増加傾向して居り, 蛋白成分分析ではAT, Hb, Cp, α_2 Mは進行度に従い増加して居り, 末期状態ではこれ等にC₄の増加がみられた。血清酵素では末期に, ALP_s及びLDHのM型の傾向も認められた。遅延型皮膚反応のDNCB, PPD, PHAは病状悪化と共に陰性化し, CRPは陽性化し, 胎児性蛋白のCEAでは増加傾向を示したが, AFPでは陰性であった。凝固線溶系のFDPについては進行癌に増量が認められた。

石川の皮電図ではI期では腰俞, 不容, 天枢, 大横, 衝門, III期では更に関元俞, 中脘陽関, 中極, 関元, IV期では更に中膠, 次膠に相当する部位に異常皮電点を認めた。

以上, 生化学的, 免疫学的, 生理学的検索によつて, 頸癌患者についての経過と予後について検討し, 上記の検索項目の組合せによつて予後推測が可能であることを証した。

質問 (山口大) 荒牧昭次郎

抄録ではB細胞比増大となつて居るが, 講演ではB細胞数となつて居る。どちらが正しいのか?

null-cellの割合は増加したような事はなかつたか。

回答 (国立埼玉病院) 村田 高明
B細胞数が悪性度と相関していると思われる。

質問 (東京医大) 秋谷 清

(1) LDH アイソザイムがM型傾向を示すと云うことであるが, これはM型が優位と云うことか, または増加していると云う意味か。

(2) β -glucuronidase については活性値はどうか。

回答 (国立埼玉病院) 村田 高明
LDHのアイソザイムでV型が認められた症例が, 更にLDH_sの増量が認められることからM型の傾向とした。

β -glucuronidase については検索を行っていない。

質問 (千葉市立病院) 加藤 喜市
我々の経験では早期癌で治療後再発の所見が認められないにもかかわらずCEAのみ異常高値をとるケースが時々あるが, かかる場合は, どのように解釈し, 対処するか。

回答 (国立埼玉病院) 村田 高明
I期でのCEAは高くても2.5ng以下であり治療により低値を示した。

246. 子宮頸部扁平上皮癌関連抗原のラジオイムノアッセイとその臨床応用

(山口大) 加藤 紘, 森岡 均
宮内 文久, 鳥越 正

最近数種の悪性腫瘍において, 血中の腫瘍関連抗原量を追跡し, もつて病状の変化を把握しようとの試みがされている。しかし抗原測定法の実用性または腫瘍特異性の点で未だ問題点が多い。我々は子宮頸部の扁平上皮癌(SCC)の関連抗原((TA-4)のRIAを行つており, TA-4がSCC患者の血中に特異的に出現することを報告してきた(Cancer, 40:1621, 1977)。今回は血中TA-4値と臨床症状との相関性について報告する。

方法: 対象とした症例は, 子宮頸部SCC 105例, 子宮以外のSCC 21例, SCC以外の対照群210例であり, 血中TA-4値はRIAにて測定した。特に血中TA-4値が高値であった23例については経日的に血中抗原量を測定し, 臨床所見の推移と比較検討した。

成績: TA-4のRIAにおける感度は5ng/mlであり, これ以上の血中濃度を示す場合を陽性とした。疾患別の